

写真：フィリピン・バンタヤン島の子供たち

CODE LETTER

Citizens towards Overseas Disaster Emergency

Contents

巻頭言：・・・・・・・・・・	1
特集：阪神・淡路大震災から 25 年・・	2
CODE 未来基金 NEWS・・・・・	6
プロジェクトレポート・・・・・	10
食と国際協力・・・・・	12
スタッフ活動記録・今後の予定・・	14
会員・寄付者ご芳名・・・・・	15
イベント案内・・・・・	15
活動へのご協力をお願い・・・・・	16

巻頭言「代表理事に就任するにあたって」

CODE は、阪神・淡路大震災を契機に、その教訓を学んで生まれた。その大震災から 25 年を迎える今、改めてその原点に立ち戻るとともに、今までの海外援助の経験を糧にして、海外援助のさらなる進化を目指すなければならない、と思う。

日本列島だけでなく地球全体が災害の時代を迎えている。世界の各地で、次々と大きな災害が起きている。その災害の実態を見ると、政治的な紛争や社会的な差別さらには経済的な格差が、その拡散と肥大化を生んでいることがわかる。

事前復興あるいは事前減災という言葉があるが、災害が起きてからの援助が必要なことはいまでもないが、災害が起きる前の「事前復興」の援助も欠かせない。海外援助の活動も、減災サイクルに即して、貧困の解消や教育の強化など、事前の支援活動にも力を入れたいと思う。

そのためには、継続的な支援ができる体力、事前でも支援ができる体力を持たなければならないし、CODE がリーダーシップをとって支援文化のすそ野を広げなければならない。文化的な基盤に加えて、財政的な基盤も人材的な基盤も強めなければならない。その基盤の強化に関わって、若い力の参画が欠かせない。

25 年というのは、親世代から子世代へのバトンタッチの節目である。その節目に、私は芹田健太郎さんの後継者として、代表理事を務めることになった。私は、若くはないがその分、若い力を育む責任があると感じている。若い力で、次の CODE と海外災害援助の進化発展に向け努力したい、と思う。

(CODE 代表理事 室崎益輝)



対談企画 阪神・淡路大震災から 25 年 —震災当時のボランティアが語る—

2020 年 1 月 17 日で阪神・淡路大震災から 25 年を迎えました。25 年前に震災ボランティアとして、ちびくろ保育園（兵庫区）、須佐野公園を拠点に活動したよしのさん、空さん、旦保さんの 3 名が、当時の思い出や経験、今のボランティアへの考えなどを語りました。



よしのさん

震災当時、高校生でちびくろ救援ぐるーぷの活動に参加。現在はちびくろ保育園で保育士として働く。



空さん

震災当時、高校生でちびくろ救援ぐるーぷの活動に参加。現在は画家として活動中。個展なども開催している。



旦保さん

震災当時、大学生でちびくろ救援ぐるーぷの活動に参加。現在はちびくろ保育園で保育士として働く。

KOBE に来た経緯と震災直後の様子

旦保：

私はボランティアに来たのは（95 年）9 月だった。

よしの：

私は当日から。兵庫区在住で家は半壊だったけど住める状態だった。弟がちびくろ保育園に通っていた。その日は田中園長たちと大丈夫？という話をしていた、その日の晩から物資を集めるということになって、翌日から保育園にいろんな人が訪ねてきた。その日から保育園で炊き出しが始まったから、活動に入るまでにタイムラグが無かった。

空：

神戸にはいろんな場所で活動している人がいて、震災前からつながりがあった。保育園で支援活動が始まり、村井さんたちと出会った。

よしの：

地元だったから連絡係や道案内に重宝された。携帯もなく、どこにいるかもわからない人も多かったから。しばらくして保護者が動けるようになって、保育園を再開させるために、ボランティアたちは須佐野公園に拠点を移した。最初は寝泊まりだけ保育園を使っていたが、だんだんと公園で寝泊まりするようになっていった。ちびくろ保育園の田中園長は震災以前から全国につながりがあったため、日本中からボランティアが田中先生を頼って神戸を訪れた。

空：

俺は 3 月から活動していた。神戸に越してきたのが前年の 4 月で、住んでいた六甲の家が全壊になった。高校から神戸に来て、定時制高校に通っていた。地震の時は起きてて、爆弾が落ちたと思った。灘区役所に避難して、亡くなった人も運ばれてきた。親が福井から来て、学校に通うためにひとまず住所は十三に取った。でも大阪と神戸は町の様子が全然違った。ボランティアが何かもわからなかったけど、知り合いの伝手で 3 月に一度神戸を訪れた。音楽ライブでニコニコしている村井さん（村井雅清 現 CODE 理事）と会い、4 月から須佐野公園の活動に参加した。最初は湊川公園でニーズ集めたりと、とにかく身体を動かさないと 16 歳の自分には耐えられなかった。

旦保：

1 月に震災が起きて、当時、姫路の大学の 1 年生だった。授業ができなかったなかで大学構内に学友会ボランティアができていた。そこには被災した神戸に行きたいという人がたくさんいた。私は被災地に行けると思っていたけれども、ボランティアを手配する事務的なことばかりで 9 月まで過ごしていた。「(神戸に)行きたいのにもうやだ！」となった。

友達はボランティアもやりつつ授業にも戻れていたが、私は授業が手につかなかった。2 年生の半分までは学校に行きつつという生活だったが、9 月に学校を半年休学して神戸を訪れた。新聞の折り込み広告のボランティア募集を見て、ちびくろ救援ぐるーぷに参加した。そこだけが長期泊まり込み OK ということで参加を決めた。

よしの：

みんな公園に住んでいたから、いろんな人の郵便物が届いていた。

旦保：

私が来た時には須佐野公園にはアルジェリアテント（震災の際にアルジェリアから寄贈された巨大テント）や、2 階建ての地域型仮設住宅があった。

よしの：

当時は優先的に独居老人を入居させたということで画期的と言われたが、後々、年寄りばかりを閉じ込めることがどうなのかという問題になった。

よしの：

長期滞在になってくると各々が自分のプライベートのために、勝手にスペースを使い始めていった。出入りが激しすぎて人間模様がすごかった！

空：

須佐野公園にいたのが 2 年間で、長期休みには人が増えたりと多い時で 50 人くらいが住んでおり、10 人くらいは定住していた。



当時、旦保さんが見つけた新聞広告

ちびくろ救援ぐるーぷの活動

よしの：

しばらくすると地元 NGO 救援連絡会議ができて村井さんはそっちに顔を出すことが多くなった。

Q：

村井さんがちびくろを引っ張っていた？

よしの：

活動初期に「大人」が元の活動に戻るためにグループを抜けたために、ちびくろ救援ぐるーぷだけがやたら若かった。下は 13 歳、10 代～20 代の若者を多く抱えていたところは他になかった。機動力はあるけれど大人と話すには若かった。村井さんがいなくなったら舐められるといったこともあった。

旦保：

村井さんがいないときはその時その時で 20 代後半から 30 代の人間が場を仕切っていた。

よしの：

村井さんはトップ会談に顔を出さなくてはいけなくて、毎朝のミーティングに顔を出した後に会議に向かっていった。メンバーそれぞれに仮設のことや力仕事など役割が生まれていった。

旦保：

私は須佐野公園と御旅公園の仮設によく行っていた。

空：

俺はなんでもやっていた。個人の家も仮設も行っていたし。ペーパードームの仮設住宅づくりなんかもしていた。絵を描く時間もなかった。在宅ケアなんて当時の制度としてなかったから、ヘルパーの訪問とか福祉の一つの流れにはなったんじゃないかなと。

よしの：

一つの仕事に行ったらニーズなんかはその場で拾ってくる。一番最初の仕事は地図作りだった。どこが通れるか、どこに助けが要りそうか。携帯もないから足で状況を探っていた。仕事も同じように行く先々でみんなが拾ってきた。それを朝のミーティングでシェアしていた。

空：

ご飯作りをするメンバーもいたし、近くに住んでるおばちゃんのご飯を作ってくれたりという通いのボランティアをしてくれる人もいた。ボランティアに来た人の中には本当に精神的に危ない状態になっている人もいた。他では断られた人でも、ちびくろで受け入れていた。

旦保：

長期休暇にちびくろで働くだけ働いて帰って、また次の休みに来るという人もいた。本当にいろいろな人がいた。

空：

長期滞在している人は心にいろいろなものを抱えている人が多かったように思う。

旦保：

あれもこれもあり、たった 2 年間のできごととは思えない。

震災から約 2 年、見えてくる問題とボランティア

Q：

公園を出るときはどうした？

空：

公園を出て活動をぐるうぷえん（※）、現在の CODE 事務所に移すか否かという話があった。
※ぐるうぷえん：ちびくろ救援ぐるーぷが須佐野公園から現在の CODE 事務所（新開地）に場所を移した後に発足したグループ。

よしの：

その時はもうボランティアを続けるかとか活動をどうするかという話ではなく、お前ら人生どうすんねんというような話になった。10 代 20 代が多くて、学校を休んで来ているような人も多かったから、こここで人生を考えろということになった。ぐるうぷえんに移ってからも残ったメンバーも多かったが、私と空は残らなかった。

旦保：

その当時お金の問題も出てきていた。私は三宮のカフェで 2 年間、月 1 日しか休まず 15 時までにはボランティア、16 時から 22 時まででは仕事という感じでバイトをしていた。私は先に須佐野公園を出て家を借りていた。後半はみんな働きながらボランティアをしていた。

よしの：

この時に被災地に残っていた問題は「震災と関係ない」と言われる問題だった。例えば独居老人の問題とか。今まで見えなかっただけで震災によって浮き彫りになった問題。今でこそ普通にある話だけど、その時は特に考えられてなかった。特に須佐野仮設は一人で住んでいた高齢者が入る所だったから、みんな寂しかったんじゃないかなと思った。特に旦保なんて、どこの家も彼女を必要としていた。（笑）
その時はボランティアって無償なのかどうかというような議論も毎日のようにした。

旦保：

発送作業もあった。そんなミーティングの内容なども記録した機関誌「てんと村だより」を出していた。

よしの：

自分たちの生活を通していろいろ話し合わなくちゃいけなかった。そもそもボランティアの概念はなんだ？とか。

旦保：

今思えばすごく時間があつたね。全然バタバタしてなかった。ぐるうぷえんに移ってからはお金の問題も出てくる。「酒宴」という居酒屋みたいな形で料理を出してお金を稼いでいたりもした。

よしの：

その流れも自分たちの団体を共同体として維持していくためのお金をどうするのかということからだった。維持しながら活動を続けていくということを模索する時期がぐるうぷえんに移った直後だったと思う。村井さんは若者に気を遣っていたと思う。10 代 20 代の子たちの将来を考えたら自分が旗を降ってついて来いとは言えなかったんじゃないか。村井さんも須佐野公園のメンバーとやりたかっただろうし、やる気のあるメンバーも多かったけど、自分自身のこととして考えろと言っていた。今思えば村井さんは大人として正しかったけど、その時はみんな苦しかった。

空：

ボランティアの保護者が来ることもあり、村井さんが対応していた。しんどかったと思う。
ボランティアを続けるかという問題はあっても、被災地から目の前に課題はあるからね。

旦保：

でもそれはもともとあった問題なんだよと言われたり。2 年も経つとそれぞれの生活もあるし。

よしの：

もし村井さんがついて来いと言っていたらついていったかもしれない。

旦保・空：

俺も、私も。

よしの：

もし村井さんが全員養えるくらいの財力があって、俺について来いと言っていたらみんなついてきたと思う。それくらいの気持ちがあった。

空：

ぐるうぷえんに移って、ちびくろの活動をやりつつ救援委員会の活動もそこでとなった時に活動を離れた。3 年間の学校生活みたいな感じだったよね。遊びだけでも活動だけでもなくてね。

よしの：

今回、いろいろなことを振り返るにあたって、今までそういう風にしか語ってこなかった。自分たちのための時間だったとか、ボランティアとは別の部分での時間でのインパクトが強くて。自分たちがどう生きるかとか、仮設の問題としてもそれは社会問題だったとか。そろそろ別の結論が欲しいと思っている。あれは私たちの青春だったとか、事実はそうなんだけど。思い出とかという言葉以外の言葉でまとめたい。

空：

阪神・淡路大震災当時のことが自分たちの中で終わっちゃったことという感じがある。特に東日本大震災はショックだった。阪神・淡路大震災が単なる序章だったと感じてしまった。

旦保：

中には戦争があり、水害があり、震災があったという流れを感じている人もいて、人それぞれの震災の考え方があると思う。

今のボランティアについて

Q：

その後も災害が続いているわけだけど、今の災害支援についてどう思う？

空：

宿泊、ご飯ありのところなら長期でも行きたいと思っている。でもそんな体力残ってるかな。

旦保：

行く前にいろいろと準備をしないとイケない。

よしの：

みんなどんな思いで神戸に来てたのかな？と。私はなかなか行けない。災害が起きた時、募金にしても物資支援にしても安心して預けられる人間関係を持っているのは強みに思う。

ボランティアのハードルが上がったと感じる。誰でも彼でもウェルカムではないというか。立ち寄りたりできない。

空：

ボランティアはこうあるべきだというのも報道されていて。

よしの：

どこかで災害があればすぐく気になる。でも行かない。というか行けない。

空：

でもたくさん起こっている中で災害が少しずつ遠くなっている。ニュースも災害時ですら災害一本ではない。

よしの：

なんで神戸の時のようにボランティアの関わり方ができないのかというのがあって、長期的に関わって必要とされると、もともとその場所が抱えてきた問題に目が向く。神戸では震災に直接関わっていない課題でも長くやることができた。今はシステムで何とかなるところのスピードがあるが、根本的に最後に残る課題の解決は 95 年の当時から変わっていない。でも NGO は課題に長く関わり続けていくものだと思っている。それが必要なことだと思う。そんな課題を掬い上げることは震災どうのこうのという問題ではない。

空：

被災地に行った人と行っていない人でも温度差がある。行けないと乗り遅れたという想いもある。

インタビューを終えて

震災直後、日本各地からそれぞれの若者が被災地 KOBE に駆け付け、そこで暮らしながらボランティアを行った。ボランティアはまさに彼ら、彼女らにとって、社会を学ぶ学校であった。ボランティアの中にはその後、それを仕事としていく者もいたが、3 人はそれを選択せずに自分の道を模索していった。今は、それぞれ子どもや家庭を持ち、神戸で暮らしているが、立て続けに起きる国内外の災害に対して心を痛み、僕たち NGO に想いを託し、自分にできることをしている。（CODE 事務局長 吉椿雅道）

CODE 未来基金 NEWS

CODE 未来基金は2014年12月の立ち上げ以降、将来的に災害NGOで働くことをめざす若者を支援してきました。2015年の第1回、第2回日中NGO・ボランティア研修への支援を皮切りに、フィールドワーク3件、インターンシッププログラム2件を実施してきました。今回はCODE未来基金プログラムのこれまでの活動を振り返っていきます。

なぜCODE未来基金が必要？

阪神・淡路大震災から25年。当時の市民活動の中心となってきた方や団体の中には、将来へのバトンタッチ、若者への継承を考えている方も多くいます。阪神・淡路大震災からこのKOBEで育まれてきた市民活動の動きを引き継いで、未来へとつなげるためには、10年後、20年後のNGOを担う「若者」が必要です。しかし、生活や自身の将来を考えた時、若者がNGOで働くという選択肢を選ぶことは容易ではありません。CODE未来基金はそんな将来の市民活動の担い手を育てること、そして若者がNGO、市民活動に携わることを社会がサポートしていくという仕組みを作るためにスタートしました。CODE未来基金を通じて、市民社会の未来をいっしょに創りませんか？

CODE 未来基金プログラムについて

未来基金では、若者が国際協力やNGOの活動を知るための機会を得るためCODE未来基金プログラムを実施しています。インターンシップ、フィールドワーク、セミナーの3つがあり、各プログラムは若者自身が企画し、選考委員会の審査の後、企画者によって実施され、事務局がサポートします。

各プログラムを通じて、参加者自身が決めたそれぞれのテーマと、NGOの活動や理念について学びを深め、またCODEも若者から考え方などフィードバックを受け、よりよい活動につなげていきます。

2016 年度前期フィリピンフィールドワーク

日時：2016年8月10日～18日（9日間）

企画者：宮津隆太（当時神戸大学2回生）他4名が参加

場所：フィリピンセブ島、バンタヤン島

タイトル：「Sign～学生に国際の支援新たな兆しを～」

このフィールドワークは学生が国際協力に関わる最初の一步になればと当時神戸大学2回生であった宮津隆太さんによって企画されました。2013年フィリピン台風Haiyanの被災地であるバンタヤン島の集落PoocとOkoyを訪れました。現地ではトウモロコシの収穫作業や漁の後の漁網撤収の手伝い、内職などを村人と一緒に行いました。村の仕事や生活を体験し、また村の中を歩きながら、学生の中から見た村の魅力を聞いてもらうことで、両村の方に島の暮らしを再確認してもらいました。



2016 年度後期ネパールフィールドワーク

日時：2017年2月22日～3月5日（12日間）

企画者：立浪雅美（当時兵庫県立大学4回生）他2名が参加

タイトル：「Discover～未来への可能性を広げよう～」

このフィールドワークは「医療」をテーマに、当時兵庫県立大学の立浪雅美さんが企画し、神戸学院大学、愛媛大学の学生とともにネパールの山村グデル村を訪れました。様々な課題を抱える山村で、生活から地域を見るために、グデル村の生活を体験しました。地域の暮らしから見える課題と、人々に寄り添う姿を見せる村の医療スタッフから多くのことを学びました。災害や医療の前に、その背景にある暮らしやその人たちに寄り添うことを、フィールドワークを通じて学びました。



2017 年度後期中国四川フィールドワーク

日時：2018年3月22日～3月30日（8日間）

企画者：西本楓（当時神戸大学2回生）他3名が参加

タイトル：「食による村おこし」

西本楓さんは2016年のフィリピンフィールドワークにも参加したメンバーであり、自身のテーマとする「食」への学びを深めるべく医食同源の故郷である中国・四川省を訪れました。CODEが支援する光明村を訪れ、村の住民らとの料理対決や生活体験、交流会を行いました。村おこしの前に、現地の人に寄り添い、暮らしを知ることが大切なことに気づきました。その他にも震災遺跡や町の食市場を訪れて学びを深めました。



2018 年度後期インターンシップ

日時：2018年10月1日～2019年3月31日

企画者：高橋大希（当時愛媛大学3回生）

当時愛媛大学3回生の高橋大希さんが、半年間インターンとしてCODE事務局で働きました。彼は未来基金のネパールフィールドワークにも参加しています。CODEでの事務作業でNGOの仕事学ぶとともに、学生ならではのアイデアで若者のネットワークづくりを進めました。また、インターン期間中に中国・四川省を訪れ、実際の災害救援の現場で学びました。



2019 年度前期インターンシップ

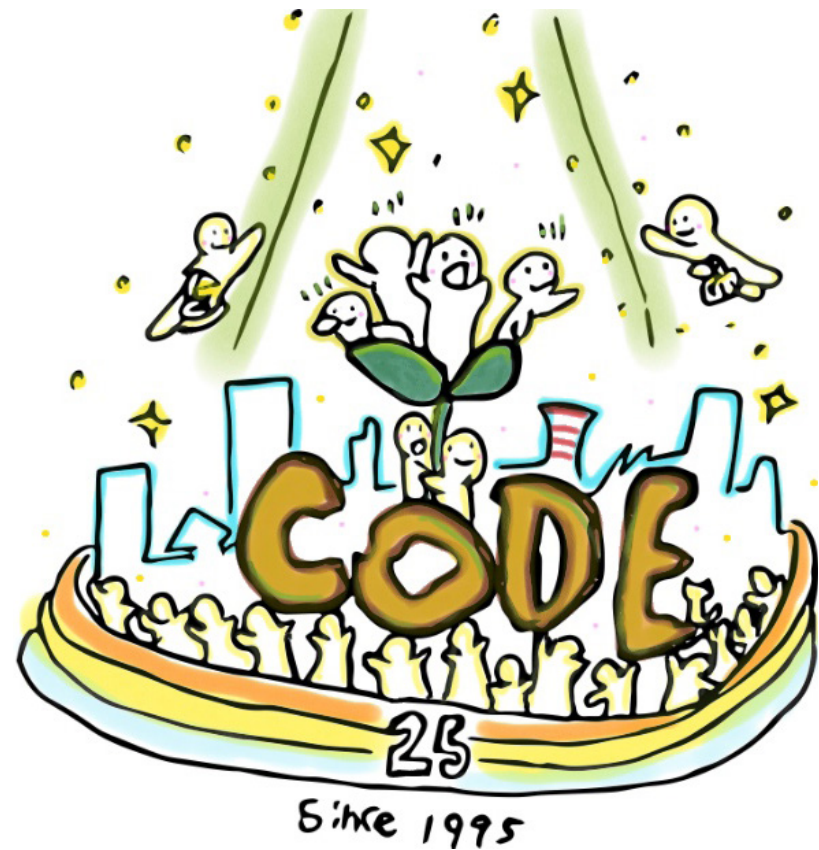
日時：2019年4月1日～9月30日

企画者：立部知保里（当時兵庫県立大学大学院博士課程1年）

兵庫県立大学大学院生の立部知保里さんが、半年間インターンとしてCODE事務局で働きました。イベントの企画や広報などの事務局業務のほか、関西大学の学生さんのフィリピンフィールドワークの企画・調整・同行を担当し、学生と現地の方々との学び合いの場をどのようにつくるのか模索しました。また阪神・淡路大震災25年に向けたCODE寺子屋の企画を主に担当し、被災地KOBEの思想と今の被災地の問題、それをいかに次の世代に伝えるかについて、考えを深めました。



CODE 未来基金 阪神・淡路大震災 25 年特別企画 若者の生き方を語る ー阪神・淡路大震災から 25 年を前にー



未来基金で海外の現場に触れた "あの若者たち" と共に若者の生き方と次代の市民社会を考える

阪神・淡路大震災から 25 年を迎える今年度、CODE は次の 25 年を担う若い世代をどう盛り上げていくかということを考え、若者を中心とした講演企画を開催しています。未来基金のフィールドワークで海外の被災地を訪れた若者たちをゲストスピーカーとし、彼らが海外の現場で何を感じ、今どのような生き方をしているのかを語っていただく連続シリーズです。

ゲストスピーカーとなる若者たちは、未来基金での経験を経て、それぞれの分野で非常におもしろい取り組みをしています。そして彼らの取り組みは、私たちの暮らしや社会課題に密接に関わっています。彼らの話から、「自分にも何かできるかもしれない」というヒントを学び、震災から次の 25 年をつくっていくための「もう一つの生き方」を考えました。

今回の CODE Letter では、第 1 回と第 2 回の開催レポートをお届けします。

開催レポート

第 1 回

「お金に依存しない自立した生活を目指して」

2019 年 10 月 27 日 講師：久保陽香

講師の久保さんは現在、栃木県にある「非電化工房」で住み込み弟子をしています。農業や建築を学びながら、電力に頼らない自活力を磨く修行生活を紹介してもらいました。また大学入学以来、国内外に積極的に飛び込んでいったことで、国際協力や自然との共存について深く考えるようになった経験が語られました。

未来基金のフィールドワークで訪問した中国・四川省の光明村では、循環する暮らしが当たり前にあることが衝撃だったという久保さん。一方で資本主義の波が村にも押し寄せていることを知り、生産手段や生きる力の必要性を痛感します。そこでの経験が、休学を決意し、自給自足を学ぶ今につながっているそうです。

修行生活の半年を終え、まだ今後のことは見えなとしつつも、「自然サイクル×ものづくり×誰かの笑顔」が自分の軸だと話してくれた久保さん。とても刺激的でワクワクするお話でした。



第 2 回

「学生のやりたいを見つける」

2019 年 11 月 17 日 講師：羽田和真

講師の羽田さんは、2018 年から NPO 法人 The Peace Front のスタッフをしており、Global Leader Tours というスタディーツアーの運営をしています。人の笑顔の源は夢ではないか、人が夢を見つけるための教育に関わりたいという羽田さん。自身の子ども時代からこれまでを振り返り、そのような思いに至った経験やターニングポイントを話してくださいました。

未来基金を通じて訪れたフィリピンでは、現地の人と「名前呼び合う」固有名詞の関係を築く中で、フィリピンに行くことが「帰省」のような感覚になり、支援や夢に対する捉え方が変わったとのこと。「当たり前」を打ち崩すのは環境しかないと考え、現在は参加者の視野を広げられるようなスタディーツアーを企画しています。

会場とのセッションでは、日本の教育の課題やデンマークからの学びなどについて議論しました。教育における評価軸がもっと多様であっていいのではないかと羽田さん。今後はオルタナティブ・スクールとして学童に取り組むことも考えているそうです。



開催概要

CODE 未来基金 阪神・淡路大震災 25 年特別企画
「若者の生き方を語るー阪神・淡路大震災から 25 年を前にー」

会 場：こうべまちづくり会館 2F ホール

第 1 回：2019 年 10 月 27 日（日） 講師：久保陽香（「非電化工房」住み込み弟子）

第 2 回：2019 年 11 月 17 日（日） 講師：羽田和真（「The Peace Front」スタッフ）

第 3 回：2019 年 12 月 22 日（日） 講師：立浪雅美（尼崎市「園田南」地域包括支援センター保健師）

第 4 回：2020 年 1 月 19 日（日） 講師：西本楓（株式会社「BugMo」共同創業者・COO）

第 5 回：2020 年 2 月 9 日（日） 講師：金益見（神戸学院大学講師）

※各回 14:00 ～ 16:00 開催

主催：CODE 海外災害援助市民センター・CODE 未来基金ユースグループ

共催・協賛：近畿労働金庫

共催：コープこうべ、神戸市、神戸市危機管理室、神戸すまいまちづくり公社、TeLL-Net、被災地 NGO 協働センター

後援：朝日新聞神戸総局、神戸新聞社、毎日新聞神戸支局、読売新聞神戸総局、NHK 神戸放送局

フィリピン台風 Haiyan 救援プロジェクト



2013年に史上最大級の台風 Haiyan が、フィリピン中部を襲い、死者・行方不明者約 8,000 人という甚大な被害を及ぼしました。CODE は、直後よりスタッフを派遣し、セブ島北部で漁業支援プロジェクトを展開しました。また、2016 年からは北陸学院大学と JICA 草の根技術協力事業を活用して、バンタヤン島の貧困漁村で女性たちの生活向上や地域の防災力向上などを行っています。

台風 Haiyan の概要

時期：2013 年 11 月 8 日（サマール島に上陸）

規模：中心気圧 895hPa（カテゴリー 5）＊最大級

最大瞬間風速 105m/ 秒

被害：死者 6,201 人 行方不明者 1,785 人

負傷者 2 万 8,626 人

倒壊家屋 115 万棟以上

避難者 381 万人

総被災者 312 万世帯 1,607 万人（全人口の 16%）



CODE の支援

発災直後、スタッフをセブ島、パナイ島に派遣し、現地調査を行いました。その後、神戸大学 PEPUP を通じてセブ島の NGO ネットワークに出会いました。そして漁業支援を行っている FIDEC とフェアトレードで農村の女性を支援している SPFTC の 2 つの NGO をカウンターパートにして、漁業支援プロジェクトを行いました。セブ島北部とバンタヤン島の 6 つの地域にボート 12 艘と漁網を提供しました。ボートは船大工によって製作され、2015 年に提供が完了しました。現在も住民によって使われています。



JICA 草の根技術協力事業

北陸学院大学の田中純一教授を中心に JICA の事業を活用して、CODE のフィールドであるバンタヤン島の Pooc、Okoy という地域で「女性の生活と収入の向上」と「被災コミュニティの防災力の向上」の二本柱でプロジェクトを進めています。



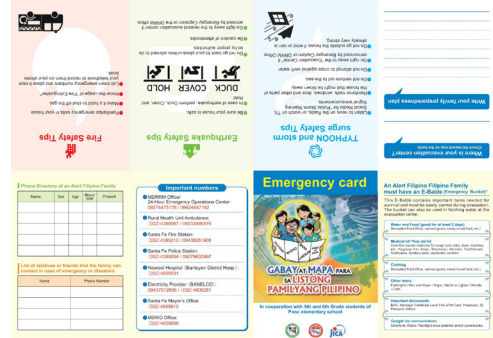
女性の生活と収入向上

現地の住民が足元を再確認するために、Pooc と Okoy でそれぞれ「リソースマッピング」を行い、身近な資源を活かして石鹸を作ろうということになりました。モリンガ、ニーム、カラマンシーなどの地元の植物を使って石鹸を一から作る中で、女性たちが、収入を得ること以上に、学ぶことの楽しさを感じています。また、パナソニックエナジー労働組合のご協力により、1 棟の石鹸作りの作業場（保管スペース）を建設することができました。



被災コミュニティの防災力向上

現在、Pooc 小学校とサンタフェ市の MDRRMC（地方災害危機削減管理局）、Pooc のバラングイ（最小行政単位）が連携して「防災カード」を作成しています。このカードには、その地域のハザードや非常時に必要なもの、緊急連絡先などの情報に加え、小学校の子どもたちがまち歩きをして得られた情報を盛り込んでいます。子どもたちがこのカードを平時から身につけることで、もしものときに自分の命を守る行動につなげます。



レポート 子どもたちとの防災まち歩き（専門家派遣 斉藤容子さん）

2019 年 11 月 30 日、フィリピン・バンタヤン島の小学校 5 年生、6 年生の 25 人と共に「防災まち歩き」を実施しました。最初のオリエンテーションの後、それぞれ学校の周りの地図と、危ないところや役立つところなどを見つけたら貼るシールを持ち、4 グループに分かれて出発。サリサリストア（小さな雑貨店）を見つけたら、「災害時に食料あるから役立つよね、だからシールを貼ろう」とグループ内で相談しながら貼っていきます。ある子は「ココナツの木のそばは実が落ちてくるから危険じゃないか」とぼそりと言ったり。友達のお父さんが偶然通りかかり、「役立つ人がきたよ」と冗談を言い合ったりしながら進んでいきます。そしてクリニックやデイケアセンターなどの場所に役立つシールを貼り学校へゴール。

彼・彼女らにとっては毎日歩くところを、災害が起こったらどうなるかと想像しながら歩いてみる初めての経験でした。最後にまとめながら、自分たちの家はどこにあり、どこに逃げるのかといったことも地図を見て確認しました。

一緒にファシリテーターとして参加をしてくれたサンタフェ市の MDRRMC の女性は「これまで私たちは学校へ行っても一方的に話さだけだった。こういう風にすればもっと楽しく子どもたちが学んでくれるということを知ることができた。他の学校でもやってもいいかな」と言いました。結果的には行政担当者へのトレーニングにもなり、今後の防災教育に活用されそうです。



スタッフ活動記録・今後の予定

活動記録

8/16 ～ 21	JICA 草の根協力事業でフィリピン派遣（北陸学院大学田中教授、吉椿、原田さん）
8/25 ～ 31	関西大学フィリピンフィールドワークに同行（立部）
8/26 ～ 30	神戸学院大学インターン（2名）
9/17 ～ 23	台湾 20 周年記念シンポジウムに参加（吉椿）
9/24	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱで講義（村井理事）
9/26	第 54 回食と国際協力「エルサルバドル」（岸本理事）開催
9/27	CODE 理事会
10/1	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱで講義（村井理事）
10/3	中部労働者福祉協議会研究集会で講演（吉椿）
10/4	桃山学院高校 SDGs 授業でコメンテーター（吉椿）
10/6	CODE ファンドレイジングのためのトレッキング（プレ企画）（村井理事）
10/8	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱで講義（村井理事）
10/9	JOCA（青年海外協力協会）大阪で外務省 NGO 研究会に出席（吉椿）
10/15	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱで講義（吉椿）
	パナソニックエナジー労働組合でフィリピン台風の講義（吉椿）
10/16	NHK 特番撮影で四川を訪問（成安理事、柳瀬さん、原田さん、吉椿）
10/22	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱで講義（村井理事）
10/24	自治労但馬丹後ブロック青年女性部定期総会で講演（吉椿）
10/25	第 55 回食と国際協力「スリランカ」（カウマディ・アベウエラさん）開催
10/27	未来基金震災 25 年企画「若者の生き方を語る」第 1 回（久保陽香さん）開催
10/28	舞子高校環境防災科で講義（吉椿）
10/29	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱで講義（村井理事、上野）
10/31	近畿ろうきん兵庫地区運営委員会で講演（吉椿、上野）
11/5	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱで講義（吉椿）
11/12	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱで講義（吉椿）
11/15	第 56 回食と国際協力「メコン」で講義（吉椿）
11/17	未来基金震災 25 年企画「若者の生き方を語る」第 2 回（羽田和真さん）開催
11/19	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱで講義（吉椿）
	第 4 回貝原俊民美しい兵庫づくり賞受賞式に出席（芹田元代表理事、宮本副代表理事、岸本理事、細川、吉椿、上野、立部）
11/22	近畿ろうきん神戸支店北須磨出張所にて講演（上野）
11/30	神戸大学都市安全研究センターオープンゼミナールで講演（吉椿）
12/3	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱで講義（村井理事）
12/8	2019 年度 CODE 寺子屋「阪神・淡路大震災から 25 年 四半世紀の歩みと”いま”」を開催
12/10	神戸学院大学社会防災特別講義Ⅱで講義（村井理事）
12/11	神港橋高校タウンミーティングで講演（吉椿）
	CODE 理事会
12/13	第 57 回食と国際協力「ネパール」（山本健一さん）開催
12/15	ワン・ワールド・フェスティバル for Youth でプログラム&ブース出展（吉椿、立部、原田さん、柳瀬さん）
12/16	JICA 草の根事業&パナソニックエナジー労働組合の視察でフィリピン（吉椿）
12/22	未来基金震災 25 年企画「若者の生き方を語る」第 3 回（立浪雅美さん）開催
12/27	大掃除、仕事納め
1/6	仕事はじめ
1/17	阪神・淡路大震災 25 年
1/19	未来基金震災 25 年企画「若者の生き方を語る」第 4 回（西本楓さん）開催
1/23	CODE 寺子屋特別編「中国の NGO の現状」（張国遠さん）を開催
1/27	CODE 寺子屋特別編「インドネシア・社会や文化につながる建築」（エコ・ブラウオトさん）を開催

今後の予定

2/9	未来基金震災 25 年企画「若者の生き方を語る」第 5 回（金益見さん）開催
2/21	CODE 理事会
2/20	第 58 回食と国際協力「ネパール」（モハン・パントさん）開催
3/19	第 59 回食と国際協力「イラン」（奥圭三さん）開催

会員・寄付者 ご芳名（50 音順、敬称略）2019/7/30～2019/12/18

【会費】

新雅彦、稲見充典、江田正子、岡本誠、岡本善弘、風間養子、北茂紀、後藤堅吾、讃井乃梨子、柴田康彦、高水一成、滝上忠美、竹代一洋、田辺エツ、旦保立子、鄭恵姫、土井勉、長澤雄二郎、自敬寺服部、榛木恵子、前畑美智子、三原悠子、山本良治佳子、吉積洋子、亘佐和子

【ご寄付】

青石えみ子、安部知子、新崎廣治、新雅彦、飯嶋朝子、井奥眞貴子、一般財団法人地域政策研究会、井上由紀子、今中由美子、岩尾興一、上田豊子、宇田川規夫、大牟田智佐子、岡田康子、岡本善弘、尾崎禮子、春日千明、亀田彩子、軽込郁、河崎紀子、岸野春子、北浦和志、北茂紀、後藤堅吾、琴浦圭子、小林貴子、小林アイ子、駒津敏行、讃井乃梨子、柴田康彦、神野夕紀子、高水一成、竹本了悟、立部貴文、田中一正、旦保立子、坪谷令子、鄭恵姫、鳥坪悦幸、中尾正嗣、中川寿子、長澤雄二郎、中村覚・佳代子、昇嶺夫、萩原邦枝、林ひさ子、林英子、原千栄子、榛木恵子、板東悦子、福住彬、古川英子、紅谷昇平、前畑美智子、三浦真里子、水野明代、湊崎康雄、山崎清、山村奈津子、山本健一、山本良治・佳子、柚原里香、横溝文夫、吉野恵子、和田幹司、渡辺知佐子、亘佐和子

イベント情報

CODE 未来基金 震災 25 年企画

「若者の生き方を語る―阪神・淡路大震災から 25 年を前に―」

CODE 未来基金のフィールドワークで海外の被災地に触れた若者たちが、未来基金での学びや、自身の取り組み・生き方について語る 5 回シリーズです。最終回となる今回は、シリーズ全体のテーマである「若者の生き方」について、講師と参加者とともに考えます。

第 5 回：「若者の生き方について考える」

日時：2020 年 2 月 9 日（日）14:00 ～ 16:00

会場：こうべまちづくり会館 2F ホール

講師：金益見（神戸学院大学講師）



第 2 回の様子

第 58 回食と国際協力

「バクタプルの再開発から学ぶ～地震から 4 年半を経たネパール～」

CODE は毎月 1 回「食」を通して世界の国々の文化や暮らしについて学ぶ場をつくっています。今回のテーマ国は「ネパール」です。2015 年に発生したネパール地震の後、耐震モデルハウスの再建プロジェクトで CODE と協働したモハン・パントさんをお招きし、バクタプル市のインナーシティ再開発について、建築の観点からお話いただきます。

日時：2020 年 2 月 20 日（木）18:30 ～ 20:00

会場：CODE 事務所

語り手：モハン・パントさん（ブルバンチャル大学クワパ工科学院教授）

今回の食：ダルバート（ネパールのカレーと豆スープ）

参加費：800 円（食事つき）



モハン・パントさん

活動へのご協力をお願いいたします

ご寄付のお願い

CODE の活動を継続するために皆さまのご寄付を募っています。救援プロジェクトへのご寄付は 25% を上限として CODE の管理運営費に使わせていただいております。ご協力をお願いいたします。

【郵便振替】

加入者名：CODE
口座記号番号：00930-0-330579

【銀行振込】

ゆうちょ銀行
支店名：〇九九（ゼロキュウキュウ）
支店番号：099
預金種別：当座
口座番号：0330579

講演会・報告会派遣

講演会、報告会を開催してみませんか？あなたの住んでいる地域で開催される講演会に CODE のスタッフを講師として派遣します。お気軽にお問合せください。現在、コープこうべ、近畿労働金庫などでも講演をさせていただきます。

入会のごお願い

私たちとともに CODE の活動を担っていく会員を募集しています。

【正会員】

CODE の意思決定に参加し、活動に積極的に関わっていただく会員です。総会での議決権を有します。

個人・学生： 年会費 5,000 円 x 1 口以上
NPO/NGO： 年会費 5,000 円 x 1 口以上
企業・団体： 年会費 30,000 円 x 1 口以上

【賛助会員】

CODE の活動に賛同し、資金面で継続的にサポートしていただく会員です。

個人・学生： 年会費 2,000 円 x 1 口以上
NPO/NGO： 年会費 2,000 円 x 1 口以上
企業・団体： 年会費 10,000 円 x 1 口以上

ボランティア募集

事務所での作業や翻訳、自宅でも可能な作業などのボランティアを募集しています。

CODE とは？

1995 年 1 月 17 日に発生した阪神・淡路大震災で、KOBÉ（阪神・淡路大震災のすべての被災地を指します）は世界 70 余りの国々から支援を受けました。その後「困ったときはお互い様」の想いから、世界各地の災害を支援しようと市民による救援活動が活発化してきました。

KOBÉ の経験と知見を活かし、幅広い智恵や能力をもつ企業、行政、国際機関、研究機関、NGO などを含めた市民の集まる場として 2002 年 1 月 17 日に NPO 法人として発足したのが CODE 海外災害援助市民センターです。

CODE は前身となる阪神大震災地元 NGO 救援連絡会議の時期も含め、これまで 62 回の救援活動を行ってきました。「最後のひとりまで」の理念を胸に、「寄り添いからつながりへ」人間復興となる救援を実践しています。

CODE の活動とは？

CODE は 2020 年 1 月現在、アフガニスタン、中国・四川省、青海省、フィリピン、ネパール、インドネシアでの救援プロジェクトを実施しています。インドネシアでの子どものためのスペースづくりやアフガニスタンでのぶどうプロジェクトなど、長い目で見た支援を「最後のひとりまで」という理念を持って KOBÉ から世界の被災地へとどけています。

また、CODE の活動を未来へつなげるために「CODE 未来基金」を立ち上げ、若手 NGO スタッフやこれから国際協力や災害支援を志す若者をサポートしています。未来基金を通じて若者が NGO で働くことができる社会を創っていきます。

発行元

（特活）CODE 海外災害援助市民センター

〒 652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通 2-1-10
TEL：078-578-7744 FAX：078-574-0702

E-mail：info@code-jp.org
HP：http://www.code-jp.org/